程度表現のホドの意味的特性と構造

東寺祐亮
（九州大学大学院）
toji.yuske1986@kyudai.jp

キーワード：日本語、意味論、統語論、程度表現、ホド

1. はじめに

日本語のホドを用いた文には、(1)や(2)のような文がある。

(1) a. 太郎はへとへとになるほど荷物を運んだ。
b. 花子はあきれるほどゆっくり走った。

(2) a. 太郎は驚くほど大きい仏像を見た。
b. 花子は恥ずかしくなるほど派手な帽子を選んだ。

(1a)は「運んだ量がへとへとになってしまいそうなくらいである」という解釈であり、(1b)は「ゆっくりさがあきれてしまいそうなくらいである」という解釈である。このように、ホド節には、副詞や動詞などで表現されている事態や状態の程度を述べる用法がある。本論文では、(1)や(2)のように何らかの程度を述べる用法のホドを「程度のホド」と呼ぶことにする。(2)の場合、ホド節は、名詞を修飾する形容詞の程度を述べている。本論文で、特に、注目したいのが、(2)の場合である。(2a)は「仏像の大きさが驚いてしまいそうなくらいであった」という解釈であり、同じように(2b)も、「帽子の派手さが恥ずかしくなりそうなくらいであった」という解釈である。

ところが、同じようにホド節が、名詞の修飾部の程度を述べている(3)は、(2)と比べて解釈しづらい。

(3) a. ??太郎はかなり驚くほど大きい仏像を見た。
b. ??花子はすこし恥ずかしくなるほど派手な帽子を選んだ。

(2a)で、「仏像の大きさが驚いてしまいそうなくらいである」という解釈が可能であるのと同じように考えれば、(3a)においても、「仏像の大きさがかなり驚いてしまいそうなくらいである」、という解釈が得られてもよさそうなところである。しかし、実際には、(3a)は容認性が低い[1]。なぜこの解釈ができないのだろうか。この程度のホドが、意味解釈を作る上で一体何をしているのか、ということ知るてがかりとなるのが、(2)対(3)なのではないだろうか。本論文では、この問題に答えていきたい[2]。

2. ホド節が表す度合い

ホド節が表す度合いについて、観察してみると、たとえば、(2a)の「驚くほど大きい」であれば、「大きさが驚くほどである」ということであり、(2b)の「恥ずかしくなるほど派手な」であれば、「派手さが恥ずかしくなるほどである」ということである。これは、(4)の「大きさ度合いがそこそこ」や、「大きさ度合いがとてつもない」と同じように、ホド節が「大きさ」の度合いがどのくらいなのかを述べているということである。

(4) a. 「大きさ」が驚くほどだ
b. 「大きさ」がそこそこだ
c. 「大きさ」がとてつもない

それに対して、(3a)の「かなり驚くほど」が不自然になるということは、「かなり驚くほど」は度合いを述べることができないということになるのだろうか。そもそも、「度合いを述べる」と一口に言っても、日本語において度合いはど

---

[1] 本論文では、特に「ホド節＋形容詞＋名詞」という形式で取り扱っている。ホド節に程度副詞が含まれると容認性が低くなるという現象は、為頼 (2004)によって指摘されたものである。

(i) a. * [かなり驚く]ほどよく落ちる。
b. *彼は[相当しつこい]ほどメールを送ってきた。 [為頼 2004: 2, (3ab)]

[2] 奥津 (1980), (1986)は「程度」を記述する P ホド Q 構文において、P の内容から非常の程度、通常の程度、同程度の 3 つの程度用法に分類している。しかし、P の内容が非常か通常か同程度かという区別では、(3)の現象を説明することができない。また、井本 (2000)は、「程度」を記述する P ホド Q 構文の P ホドが純粋程度を述べるだけでなく、P ホドが数量詞的性質を持ち、P ホドの修飾先である Q の動詞や名詞と P ホドとの相互作用によって、事象回数、動作量を計量する用法があると指摘している。しかし、井本 (2000)においても、そもそもホド節の容認性が低い(3)の現象を説明することができない。

のようにして述べられるのだろうか。

日本語において、そもそも度合いをどう表すかということを考えてみると、度合いというものは数値で表される場合と、言葉で表される場合とがある。たとえば、(5)は度合いが数値で表される場合である。

(5) a. 大きさが 24cm
b. 高さが 108m

それに対して、(6)は度合いが言葉で表される場合である。

(6) a. 大きさがとてつもない／大きさがそこそこだ
b. とてつもない大きさの建物／そこそこの大きさの建物／…

(6)を帯グラフで表すと、(7)のようになるだろう。

(7) 【大きさ】

・・・	そこそこ	とてつもない

(7)のように、「大きさ」が、「とてつもない」と言えば、大きさのスケールにおいて、度合いが大きい方に極端な範囲を表しているということになる。「大きさ」が「そこそこ」と言えば、度合いが真ん中くらいの範囲を表しているということになる。このように、度合いの表現は、何らかのスケールについて、それがどのような範囲なのかを述べる。このように考えてみると、度合いを表す表現は、いわば、スケールについて区切りを入れているようなものであると考えることができる。

では、(2)のホドの場合はどのようにして度合いを表しているのだろうか。ここで注目したいのは、たとえば、「驚くほど大きい」であれば、「驚く」というデキゴトを使って「大きさ」の度合いを表しているということである。つまり、ホドは、本来、度合いを表わさないデキゴトを使って、何らかのスケールの度合いを表している。「驚くほど大きい」の場合、「大きさ」について「驚く大きさ」と、「驚かない大きさ」という区切りが想定され、そのうち、「驚く大きさ」であると述べている、と考えたい。

(8) 【大きさ】

驚かない	驚く

「大きさ」について、「驚く」のか「驚かない」のかという区切り、つまり、「V」なのか「―V」なのかという区切りを作り出すことによって、デキゴトで度合いを表現することができるのではないだろうか。

3. 分析を支持する現象と説明

3.1. ホド節が程度副詞と同じように度合いを表すことを示す現象

ホド節が、程度副詞と同じように、度合いを表していると考えると、(9)の容認性の低さを説明することができる。

(9) a. ?? 驚くほど かなり 大きい仏像を見た。
b. ?? 花子は しつこいほど 相当 長いメールを送ってきた。

(9a)の「驚くほど」と「かなり」のどちらも、「大きい」の度合いが非常に高い度合いであることを表す表現である。また、(9b)の「しつこいほど」と「相当」はどちらも「長い」の度合いを表す表現である。つまり、(9a)には、「大きい」という１つのスケールを表す語に対して、２つの度合いを表す語があることになる。そのため、どの度合いかを定めづらくて、容認性が低くなる。(9b)においても、「長い」というスケールを表す１つの語に対して、「しつこいほど」と「すごく」という２つの度合いを表す語がある。

そもそも、程度副詞のように、何らかの度合いを表すような言語表現が、スケールを表す語を２重に修飾すると容認性が低くなる。たとえば、(10)のように、１つのスケールを表す語に、度合いを表す語が１つある場合は、何ら問題なく容認される。

(10) a. 今日は、とても 暑いね。
b. 今日は、かなり 暑いね。

しかし、(11)で、１つのスケールを表す語に、度合いを表す語が２つある場合は、容認性が低くなる。(11a)には、「暑い」というスケールを表す語に、「とても」と「かなり」という２つの度合いを表す語がある。

(11) a. ??今日は、 とても かなり 暑いね。
b. ??このお湯は、 なかなか 非常に 高い温度だ。

(11b)のように、度合いを表す語の度合いが異なる場合は特に容認性が低い。

つまり、(9)の容認性が低いのは、程度副詞の「かなり」と同じように、ホド節がスケールを表す語の度合いを定めているからである。

3.2. ホド節がデキゴトの対立から度合いを表すことを示す現象

ホド節はスケールを「V」「¬V」に区切ることで、デキゴトを用いて度合いを表すことができる、そう考えると、(12)が説明できる。

(12)　??健はかなり驚くほど大きな仏像を見た。（＝(3a)）
　　cf.　ok 健は驚くほど大きな仏像を見た。（＝(2a)）

(12)のように、ホド節に程度副詞が含まれると、容認性が低くなる。この場合に作られる区切りは、(13)のように、「かなり驚く」対「かなり驚かない」になる。

(13)　【大きさ】 | ??かなり驚かない　　かなり驚く |

すると、ここには、「??かなり驚かない」という非常に解釈しにくい意味が含まれることになる。これこそが、(12)の容認性の低さの原因である。つまり、「V」「¬V」という区切りに「??かなり驚かない」のような、容認可能性の低い意味が含まれる場合に、文の容認性が低くなるのである。

加えて、(14)のように、(3a)の「V」「¬V」の区切りが容認しやすくなるような文脈を加えると、いくぶん容認しやすくなる。

(14)　（文脈 : 予想よりも大きな仏像を見たら、かなり驚くこともあるだろうが、見た仏像が予想より小さければ、「かなり」というほどは驚かないこともあるだろう。）
　　?太郎はかなり驚くほど大きい仏像を見た。

(14)のような文脈を前提にすると、「かなり驚かない」は「かなり驚く」が起きないという解釈で幾分容認しやすくなる。すると、(15)の「V」「¬V」の区切りに容認可能性の低い意味がなくなるため、(14)が容認しやすくなるのである。

(15)　【大きさ】 | ?かなり驚かない　　かなり驚く |

この現象は、ただ単に、ホド節内に修飾部が含まれれば、容認性が低くなるということではない。(16)の場合は十分に容認される。

(16)　　太郎は[急いで飛び出すほど]危険な事態に陥った。

この場合は、帯グラフのように、「急いで飛び出す」と「急いで飛び出さない」になる。(17)の「急いで飛び出さない」は、解釈可能であるため、(16)はホド節内に修飾部が含まれても容認される。

(17)　　【危険さ】 急いで飛び出さない　　急いで飛び出す

このように、ホド節がスケールを区切る「V」「¬V」の解釈可能性が、この程度のホドの文の容認性に影響を与えているのである。

3.3. 分析に基づいた説明

本論文の分析に基づいて、名詞の修飾部である場合、動詞の修飾部や動詞である場合を改めて説明する。

この場合のホド節が表すスケールの「V」「¬V」という区切りは、「恥ずかしくなる」対「恥ずかしくならない」である。

(2b)　　花子は恥ずかしくなるほど派手な帽子を選んだ。

【帽子の派手さ】 恥ずかしくならない　　恥ずかしくなる

(2b)の対立は、容認できるので、(2b)は容認可能である。

(1b)は、動詞の修飾部「ゆっくり」をホド節が修飾している場合である。

(1b)　　花子はあきれるほどゆっくり走った。

【遅さ】 あきれない　　あきれる

この場合は、「あきれる」対「あきれない」で、容認できるので、(1b)は容認可能である。

また、(1a)は動詞そのものをホド節が修飾している場合である。

(1a)　　太郎はへとへとになるほど荷物を運んだ。

【運んだ量】 へとへとにならない量　　へとへとになる量

(1a)のように、動詞を修飾した場合は、動詞の量か、頻度のスケールについて、度合いを表すことになる。この場合は、「へとへとになる」対「へとへとにならない」で容認できるので、(1b)は容認可能である。

3.4. 動詞に含まれるスケール

動詞の場合に、「量」、もしくは「頻度」のスケールで解釈されることについて、考えておく必要がある。たとえば、(18)の場合も、「歌った」の量のスケールで解釈される。

(18)　　花子は喉がガラガラに嗄れるほど歌った。

動詞の場合に、「量」もしくは「頻度」のスケールで解釈されるのは、程度のホドだけでなく、他の構文にもみられることである。たとえば、(19)のような、V スギル構文でも同じことが観察できる。V スギル構文は、何らかのスケールにおいて度合いが過剰であるという意味になる。

(19) a.　太郎は、高価なプレゼントを選びすぎた。[cf.東寺 2012: 240, (1b)]
　　 b.　太郎は、プレゼントを選びすぎた。

「太郎は非常に高価なプレゼントをたった一つ選んだ」という文脈で、(19a)を見れば「プレゼントが高価すぎた」という解釈が可能である。また、「太郎はそこそこ高価なプレゼントをたくさん選んだ」という文脈で(19a)を見れば、「たくさん選び過ぎた」という解釈も可能である。これに対して、(19b)の「プレゼント」のように、名詞単体では、たとえ文脈があっても、スケールを表す語である「高価な」がなければ、「プレゼントが高価すぎた」という解釈はできない。一方、動詞の方は、スケールを表す修飾部がなくとも、「たくさん選び過ぎた」という「選ぶ」の量のスケールで解釈が生じる。つまり、動詞は、「量」、もしくは「頻度」のスケールを、語彙的に持っていると考えるのが適切である。それゆえ、程度のホドの(18)で、「歌った量」の度合いを述べることができる。

3.5. 意味解釈上の係り受け関係に対応する構造

ホド節が度合いを表すことができるのは、スケールを表す語のスケールについて、「V」「¬V」の区切りを入れるからであるという本論文の提案に基づくならば、ホド節とスケールを表す語が直接構造的関係を持つと考えるのがいいだろう。事実、(20)は「つまらなさが申し訳なくなりそうなくらいである」という解釈であり、ホド節は「仕事」について直接述べているのではなく「つまらない」の度合いを述べている。

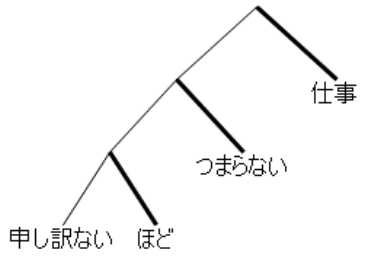
(20)　申し訳ないほどつまらない仕事
　　解釈：つまらなさが申し訳なくなりそうなくらいである。

一方、ホドがない(21)は「仕事が、申し訳なく、かつ、つまらない」という、「申し訳ない」と「つまらない」が等位的に「仕事」に係る解釈になる。

(21)　申し訳ないつまらない仕事
　　解釈：仕事が、申し訳なく、かつ、つまらない。

このように考えると、意味解釈上の係り受け関係に対応する統語構造は(22)を考えるのが妥当である。

(22)　(20)の構造
　　[[[[申し訳ない]ほど]つまらない]仕事]



(22)のように、ホド節がスケールを表わす語と直接係り受け関係を持つと考えればよい。

4. おわりに

本論文では、程度のホドが、スケールに対して「V」「¬V」という区切りを入れることで、本来度合いを表わさないデキゴトを使って度合いを表わすこと

ができるということを指摘した。

今後の課題としては、(23)のような場合である。

(23)　　内閣は、議員の 80%が反対するほどひどい法案を提出した。

(23)は、本論文で指摘したように、「法案のひどさが議員の 80%が反対しそうなくらいだった」という解釈が可能である。しかし、同時に、「法案がひどかったために、実際に、80%もの議員が反対してしまった」という解釈も可能である。これは、「ひどい法案を提出した」というデキゴトの結果として、「議員の 80%が反対した」というデキゴトが実際に起きたという解釈である。ホド節のデキゴトが実際に結果として起きたということを表わすという点で、本論文で指摘したホドとは大きく異なる解釈である。本論文で指摘したホドが、3.5 節で(22)の構造を作ることを指摘したが、結果を表わす場合のホド節は、そのデキゴトの結果を表わす性質から、スケールを表わす語と直接の係り受け関係を持つ(22)とは異なる構造を作る可能性がある。さらに、本論文で取り扱った(3)の容認性が高いと感じる場合もあるかもしれない。その場合には、実は、「太郎は大きい仏像を見たので、本当に、「かなり驚く」ということが起きた」という結果を表す場合の解釈が生まれている可能性がある。

(24)　a.　ok 太郎はかなり驚くほど大きい仏像を見た。
　　b.　ok 花子はすこし恥ずかしくなるほど派手な帽子を選んだ。

今後、なぜ(3)の容認可能性が低いのかということと、因果の解釈を生じさせるホドについて考察していきたい。

参考文献

井本亮 (2000) 「連用修飾成分「ほど 」句の用法について」 『日本語科学』 8: 7-28.

井本亮 (2004)「誇張表現としてのホド構文」『日本語と日本文学』 38: 1-15.

仁田義雄 (2002)『副詞的表現の諸相』東京：くろしお出版.

丹羽哲也 (1992)「程度副詞における程度と取り立て」『人文研究』 44 (13): 93-128.

奥津敬一郎 (1980)「「ホド」―程度の形式副詞」『日本語教育』41: 149-168.

奥津敬一郎 (1986)「形式副詞」沼田善子・杉本武(編)『いわゆる日本語助詞の研究』: 29-104. 東京: 凡人社.

為頼梨絵 (2004) 『形式副詞ホドの非常の用法について』, 卒業論文, 九州大学.
東寺祐亮 (2012) 「V スギル構文の解釈と構造」『日本言語学会第 144 回大会予稿集』：240-244.

The Semantic Properties and the Structure of the *Hodo*-Degree Construction

Yusuke Toji
(Kyushu University)

This paper discusses the semantic properties and the structure of the *Hodo*-degree construction in Japanese, as illustrated in (1a).

(1) a. ok (Ken wa) [$_P$ odoroku] hodo [$_Q$ ookina butuzoo o mi ta]
Ken top surprise hodo big Buddha acc look perfect

b. ?? (Ken wa) [$_P$ kanari odoroku] hodo [$_Q$ ookina butuzoo o mi ta]
Ken top pretty surprise hodo big Buddha acc look perfect

(1a) is interpreted as "Ken saw a Buddha statue which was so large that Ken was surprised." (1b), which contains *kanari* in P, is much less acceptable than (1a). This paper proposes that the *Hodo*-degree construction makes use of a presupposition which states that "Q→P & ¬Q→¬P", and argues that the low acceptability of (1b) is caused by the fact that the representation corresponding to "¬P", i.e., *kanari odorokanai*, is hardly acceptable.

(初稿受理日　2014 年 3 月 23 日　　最終稿受理日　2014 年 7 月 23 日)